青年期現在の愛着状態が
過去の対人的傷つき経験に及ぼす影響

○宮本海胡・稲月聡子
(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

研究の目的

対人関係における傷つき経験は，経験後の行動や考えに様々な影響を及ぼすことがこれまでの研究で明らかにされている。また，愛着は，特定の人との間に形成される情緒的なつながりや絆であり，乳幼児期から養育者との相互関係によって形成される（Bowlby, 1969）が，愛着状態の不安定さは，他者から拒絶されることや見捨てられることへの敏感さなど，対人関係における課題に繋がると指摘されている。このように，愛着は対人関係において重要な要素であるが，ネガティブな対人関係である“対人的傷つき経験”との関連を扱った研究や過去の傷つき経験の評価に影響を及ぼす要因を検討した研究は少ない。これらを踏まえ，本研究では，現在の愛着状態が過去の対人的傷つき経験の評価に与える影響について検討することを目的とする。

方法

対象者　大学生，大学院生 203 名（男性 54 名，女性 147 名，回答しない 2 名，平均年齢 20.15 歳，*SD*＝1.54）の回答を分析対象とした。

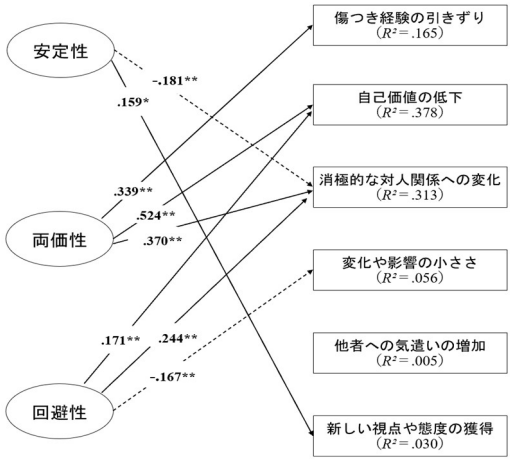
手続き　2024 年 8 月～12 月に，Google フォームを用いてオンライン上で実施した。質問紙は，（a）デモグラフィック変数（性別，年齢，学年），（b）傷つき経験の多さおよび程度の高さを測定するための尺度 5 項目，（c）具体的な対人的傷つき経験（内容，相手，時期），（d）対人的傷つき経験の影響尺度（永井（2018）の「友人関係における対人的傷つき経験の影響尺度」を一部変更）：6 因子 32 項目，（e）成人版愛着スタイル尺度（詫摩ら，1988）：3 因子 18 項目によって構成された。

結果と考察

現在の愛着状態が過去の対人的傷つき経験の評価に与える影響を検討するため，愛着状態得点の 3 因子を独立変数，対人的傷つき経験の影響尺度の下位尺度得点 6 因子を従属変数として重回帰分析を行った。その結果（図 1），回避性と両価性は，「自己価値の低下」，「消極的な対人関係への変化」に正の影響を与えることが示された。一方で，安定性は「消極的な対人関係への変化」に負の影響を与えている。このことから，不安定な愛着状態であることは，過去の対人的傷つき経験を自己価値を低下させるものとして評価することに繋がると考えられる。また，安定的な愛着状態では，傷つき経験によって対人関係が消極化したとは捉えない傾向がある一方で，不安定な愛着状態では，消極化したと認識する傾向が高いことが明らかになった。しかし，永井（2018）は，傷つき経験を活かし，傷つきを避けた適応的な友人関係の構築が行われることがあると示している。このことを考慮すると，不安定な愛着状態であっても，消極化した対人関係の範囲で適応的な対人関係を築くことができている可能性はあると推察される。さらに，安定性は，「新しい視点や態度の獲得」というポジティブな評価に正の影響を与えている。安定的な愛着状態であることは，レジリエンスを向上させる（Svanberg，1998）ために，ネガティブな対人的傷つき経験も新たな視点や態度の獲得に繋がったと評価し得ると考えられる。

本研究では，青年期現在の各愛着状態が過去の対人的傷つき経験の評価にそれぞれ異なる影響を及ぼすことが明らかになった。また本研究では安定性，両価性，回避性を愛着状態として扱ったが，近年注目されている無秩序・無方向型（繁田，2019）を含めた検討も今後は必要である。

図1　愛着状態と対人的傷つき経験の影響評価のパス図



(*p<. 05, **p<. 01)